

を除くことが能力を高めることになるが、それだけでは発達の問題が抜けてしまうのではないか。上野氏の場合、適応力を高めるにはどうすればよいのか。発達という観点からすると、ある発達段階における能力がそれより上の発達段階のどのような能力とどのようにかわってくるのかという問題が重要であろう。

指定討論(2)

宮本 実

能力の概念はきわめて多義的であり、分野によってそれぞれ能力観は異なるが、能力を発達の立場から見るということは共通していた。この発達の立場から4人の発表についての包括的な検討を試みることは意味があると思う。発達の立場とは、司会者がシンポジウムの主旨の中で述べているように①実力が将来示されるようになる潜在的可能性が能力である②能力はどのような遺伝と環境の相互作用によるものであるか③能力の発達には臨界期があるか④望ましい能力を発達させるための教育と指導の役割は何かなどの問題が考えられよう。4つの分野の話題提供者は、それぞれこの発達の立場のどれかに焦点をあてて論じられていたように思う。

須賀氏の「能力に関する数論的関数モデル」では、能力の概念の定義は特になされていなかったが、認知発達の潜在的可能として能力が問題にされたようである。氏は発達の立場として②の遺伝と環境の相互作用の問題に焦点をあて、数論的関数モデルを展開している。これによれば、能力は環境によって無限に発散するのではない。とりわけプラトーンに達した後の学習現象を理解するためには、従来の学習概念は捨てるべきで、新しい行動変容概念を必要とする。それは「一過性の調節」というような概念を示唆している。人間の認知能力は想像以上に豊富な生得的可能性が潜在している。それは決して自己完結的ではなく、柔軟かつ多様な発達を支える基盤として機能している。この開かれた生得的性の発達に従来の学習概念に代る新しい行動変容の概念が必要とされるというのである。この概念は通常の学習概念と区別されるべきもので広範な行動現象にあてはまるものであるとすれば、能力の訓練・教育の問題についても言及がほしい。

松原氏の「Counseling の立場から見た能力」では、能力は Capacity と ability の両方であるとし④の立場に立って Capacity の最大限の発達にとって指導技術、環境、興味、意欲、レディネスが大切であるとした。その事例として帰国子女・無気力学生などの学業不振をあげている。能力の発達の領域固有性および一般性・発達の臨界期に関してはほとんど言及されていないか

った。また、能力の価値基準は、その属する社会の要請によって定まるということは、Counseling の立場にとって重要な課題であろう。

上野氏の「発達臨床診断と治療教育を通して」では、障害児における能力観および指導と教育の問題に焦点があてられた。障害児が生活する社会・文化的環境の中で、彼らに残された発達の可能性についての予測をしながら、最大の効果をあげ得る教育的配慮が重要であるとした。また総合的かつ流動的な能力観が強調されたが、障害児の治療教育における可塑性とその限界早期教育の問題なども問題にされよう。人間の能力に対する多次的価値基準と社会が要請する価値基準は必ずしも合致するものではないところに大きな問題であろう。

無藤氏の「意味を作り出す存在としての人の発達」では、意味作り出しの過程の総体が発達であり、能力はその意味を作り出す方略の個人差であるとする。意味を作り出す能力はすべての人が持っているが、個人差が生じる過程がどのようなものであるかに焦点が向けられている。私の理解では、意味を作る能力の発達とは、文化的実践に参加することであり、参加するということ、これを受け入れ、自発的に価値を発見し、創造活動に参加することであるということではないだろうか。このような意味獲得の能動性が他者とのかかわりの中でどのように発達して行く過程が解明されるならば、「わかる能力」を育てる教育実践にとっても有益であろう。

質疑と討論

筒井健雄氏(信州大)から、「何のために能力の向上を求めるのか」についての質問が提出された。これに対して須賀氏は、能力はその内的素地が環境を取り込みながら、自己発達をとげていくものだから、教育が能力の発達に関与することはできない。学習によって能力が向上するようにみえても、それは一過性の調整にすぎず、教育とはせいぜい、先行世代から後の世代に文化を伝達するという役割しか持っていない、とのべている。

一方、松原氏は、能力の発達とは、最高の能力が発揮できるようになることをめざすべきであり、その条件を整えてやるのが、教育であるという。どんな能力があっても、その知識を習っていない者、表現力のない者、興味のない者は、その能力を発揮することができないからである。

適応力を能力とみる上野氏は、人間の可能性についての認識を、もっと持つべきだという。すなわち、能力の多面性という見地から、子どもにできること、できないこと、できそうもないことを、明確にする必要がある。われわれは、とかく知識だけを追いすぎているが、能力